

第19回ミツバチ研究会に参加して

田口 迪太郎

私の「ミツバチ暦」は、今年も、恒例の玉川大学ミツバチ科学研究会で始まった。屠蘇の香りもまだ残る1月12日、正門から会場の農学部に至る玉川学園の広い構内は清掃が行き届いてすがすがしい。15分前に会場に着いたときには、すでにほぼ満席の盛況。プログラムに添付された参加者名簿は203名に達している。

10時30分、松香教授の開会挨拶。昨96年のミツバチ科学会の回顧と97年の展望。特に今年は、アピモンディア100周年でもあり、世界的な傾向として、ポリネーターとしての役割や環境問題との関連などで、ミツバチがいっそう注目される年になるだろうと。

岡田先生はご挨拶の中で、養蜂環境を豊かにするために、自らもクロガネモチの栽培を試みていることを紹介しながら、養蜂関係者それぞれが足元、地元の蜜源植物の増殖に向けて、大運動を展開してほしいと呼びかけられた。

二人の学生の研究発表は、いつもながらに、初々しく真摯であるのが嬉しい。小原氏は光周制御によって自然交尾の時間帯を制御する実験、埴氏はニホンミツバチの人工授精に関するものだったが、スライド写真によって示された顕微鏡下での細かい授精処理は臨場感があった。

特別講演は、筑波大学の鷺谷助教授による「サクラソウの繁殖とポリネーターの関係」。絶滅の危機にあるといわれるサクラソウが、最良のポリネーターとしてマルハナバチを選択し、花の構造がこの蜂によって種子の生産性が高められ、同時に、近親交配をさせて後世代の保全を図るように進化していることなど、自然界の深遠な仕組みに感銘させられた。



図1 講演中の鷺谷氏(左)と池田氏(右)

ゼリア新薬工業(株)の池田氏の「ストレスとローヤルゼリー」は、蜂飼いにはきわめて身近なローヤルゼリーが、滋養強壯剤として市販されるためには、新薬開発に準ずる厳しいプロセスを経なければならないことを知らされた。

帰宅後、ふと思いついて、名簿に記載されている所属機関に頼って、参加者の分類を試みた。203名のうち、(1)大学・研究機関・行政関係43名(21%)、(2)養蜂業42名(21%)、(3)医薬品、食品企業40名(20%)、(4)所属の記載なしが57名(28%)。残りの21名は所属機関からは業務内容を判別しかねる方。なぜこのようなことをしてみたか、「生業」としてではなく「趣味」として、いわば「気楽な蜂飼い」仲間が何人くらいなのかに興味があったからであるが、残念ながら、上記(4)の中から探り当てることはできなかった。

しかし、この研究会の参加者の顔ぶれが多様なことがはっきり浮き出し、これは、ミツバチの持つキャパシティの大きさと、ミツバチに託す人間の期待の大きさを端的に表すとともに、この研究会の包容力の大きさを示すものであろう。ハチミツ、蜂ろう、花粉、ローヤルゼリー、プロポリス等の食品や医薬品の生産、果樹、蔬菜類のポリネーターに加えて、自然界のバランス保持と環境の指標などなど、すでにミツバチの小さな体には背負いきれないほどの大きな期待が寄せられているが、筆者はこれにもう一つ、人間の情感に深く関わる「ホビー」「ペット」の役割をも加えて欲しいのである。